

事業報告

5年目を迎えるナノテクノロジープラットフォーム

文科省ナノテクノロジープラットフォーム事業も、平成28年度で5年目、ちょうど折り返し地点となりました。少しずつ分子研の皆様にも、そして日本全国の企業や大学へも認知度が高まってきた頃かと思います。分子研は3つあるプラットフォームの中の「分子・物質合成プラットフォーム」に参画し、かつ11機関をとりまとめる代表機関として活動しています。平成27年12月からは、野田コーディネーターを雇用し、更に広報や研究支援に力を入れています。分子・物質合成プラットフォームの総合ホームページも今年度リニューアルし、スマホ・タブレット対応に変わっただけでなく、ユーザーの方の生の声をインタビューしたユーザーボイスのページも加わり、幅広く情報を発信しています。ちなみにFacebookも使っているのですが、なかなか「いいね」が増えないのが悩みです。

さて、4年目が終わりを迎え、プラットフォーム全体でも成果が挙がってきました。特に1年に一度、3プラットフォームの支援の中から「秀でた利用6大成果」と称して、表彰があります。この賞はプラットフォーム事業の中での賞ではありますが、外部有識者らから成る委員会が約3000件もの利用から6件だけを選出するもので、受賞は大変狭き門と言えます。分子・物質合成プラットフォームからは平成24年度（名大・九大）、平成25年度（JAIST、名工大、分子研）が選ばれました。平成25年度の分子研からの受賞は、高磁場ESR等を用いた「内包フラーレン分子錯体の特徴的分子磁性のESR測定」（京大・加藤立久氏ほか）でした。先日、平成26年度実施分が対象の今年度の発表があり、分子・物質合成プラットフォームからは名大と分子研の2件が選出されました。代表機関の立場としてプラットフォーム内の11機関がまんべんなく受賞してほしい、というのが本心なのですが、名大も分子研も2度目となりました。

分子研の受賞は、科学警察研究所からの依頼で行った「指定薬物3,4-ジクロロメチルフェニデートの合成と分析」でした。社会的インパクトが大きかったことがその理由と推察できます。この支援は、2年前に日本薬学会年会にて本プラットフォームがブース出展した際、県警の方が興味を持たれ、科警研を紹介頂いたことがきっかけで支援が始まりました。広報から支援実施まで全過程をナノテクノロジープラットフォームで行った課題でした。脱法ドラッグなんぞ研究所で合成していいものか？というお声もあったかもしれませんが、東林先生の実験補助のもと、目的の化合物の不斉合成に成功することができました。脱法ドラッグの乱用に伴い、規制される薬物は数を増しているにも関わらず、科捜研の上位機関である警察庁科警研ですら標準品を手に入れられない状況にあるということが、今回の合成を引き受けた背景にあります。ナノテクノロジープラットフォームではもちろん、最先端の科学技術を提供し、最先端の研究をすることも目的ではありますが、世の中の役に立つ技術も提供していかなければならないと考えています。今後も幅広く、様々な課題を拾い上げ、支援を続けて行きたいと思っています。



平成27年度「秀でた利用6大成果」受賞式